

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成26年 3月 第157号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

認知症で徘徊・事故—公的な賠償制度を

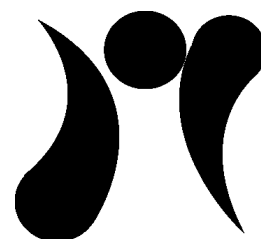
公益社団法人「認知症の人と家族の会」(本部・京都市)は、認知症の男性が徘徊して線路に立入り、列車にはねられて死亡した事故の損害賠償を遺族に命じた8月の名古屋地裁判決について、「取り消すべきだ」との見解を発表した、と讀賣新聞が報じています。同時に、認知症のために生じた被害に対し、介護保険の中に仕組みを設けるなど、公的な賠償制度を検討することも提案している、という。(2013年12月14日付讀賣新聞朝刊)

最近、高速道路を逆走したり通学路で事故を起こしたりと、認知症のために生じる事故や被害が増加しています。自動車保険における交通事故と同様に、介護保険における『保険事故』が起きたのであり、介護保険制度の中に損害賠償の仕組みを設ける事は、『妥当な提案』だと思います。判決は全面的に家族の責任と賠償を求めますが、基本的には本人の資産で賠償する事が前提であり、資産が無ければ、保険で賠償する事が妥当な仕組みだと思います。

介護保険制度では、家族の責任と同様に、『施設の管理責任』を強く求める中で、全館電子ロックの特養やグループホームが増えています。自力では自由に出入りできない『籠の鳥』に、『QOL』の高い暮らしや『尊厳』ある生活は望めない、と思います。裁判官には、『家族の責任』を求める以前に、認知症になった人の社会人としての『人格』『尊厳』『使命』について、深く掘り下げた議論を展開して欲しい、と強く願います。認知症で徘徊して事故死した命でも、その懸命な生き様には次の世代に手渡すバトンが潜んでいます。自己責任で始末して貰う事が、故人の人格と尊厳と社会的使命を護る途だと思います。

最近、学校でのいじめによる子供の自殺や、大きな自然災害時の死亡事故について、『誰かの責任』を追及する姿勢が目立ちます。大津市で起きた中学生の『自殺といじめ』についての事件以降、全国各地の学校で同様の事例が報道されています。また、東日本大震災で亡くなった石巻市・大川小

(次ページへつづく)

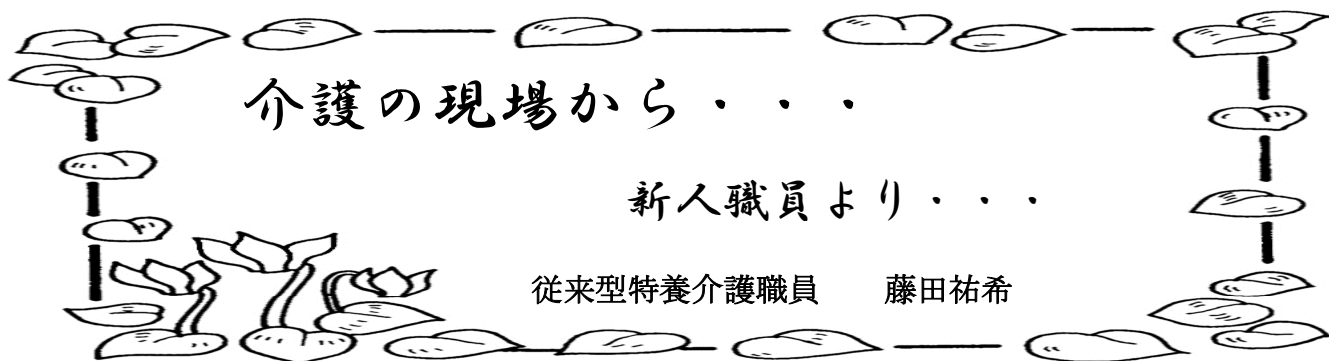


(前ページのつづき)

学校の児童の遺族が、県や市などに損害賠償を求めて提訴しました。親が子供の死を納得するには、『誰の責任か』を明確にして、賠償を求める事が必要なのかも知れませんが、しかし其れが、次世代の子供に残す『教訓』になるとは思えません。心ならずも災害で死を迎えた幼い命でも、その生きた証としての教訓を汲み取り伝える事が、親と教師と周りの大人の責務です。

『津波てんでんこ』。三陸地方では数百年前から津波が来たら『逃げろ』と教えます。地震や津波で恐怖を感じた時逃げるのは、動物の『本能』です。社会で『いじめ』に逢う時も、自然界で地震や津波に合う時も、恐怖を感じたら『逃げろ』と教える親であり、大人でありたい、と切に願います。自然の一員として生きる限り、死ぬまで本能を失わずに生きていたい、と心より念じます。

せいりょう園 渋谷 哲



入社して、約1年が経とうとしています。介護についてどのような仕事内容か想像も出来ず、せいりょう園に入社しました。働き出し、先輩方に教わっていく中で私が思っていた介護との違いが沢山ありました。それは、決まった時間・決まった順序でケアしていくものだと思っていましたが、実際は、その時の状態によって時間・順序にとらわれずケアを行うものなのだと感じるようになりました。

車椅子の方、杖をつけて歩く方、ベッドで寝たきり状態の方など、様々な利用者がいます。その方に合ったケアを学んでいく中で、私は利用者の方から教わる事がありました。認知症の方も、態度や言葉でしっかりと自身の意思を訴えて下さり、私自身がこの仕事をしていく中でアドバイスやヒントがあるように思えました。様々な介助を行い「ありがとう」と何度も言われます。1つ1つどのようなケアでも、ただ何となくケアするものではありません。その間にコミュニケーションをとったり、利用者の気持ちになり「自分だったら、このケアは嫌だな。」等と考えられるような介護職になりたいです。

状態が安定している方の日常生活のケアばかりではなく、状態の悪い終末期の方のケアを約1年の中で何度か関わる事がありました。私は今まで人が亡くなるという事は病院しか見た事ありません。最期まで酸素マスクをされているのが記憶にあります。せいりょう園に入社して、人を自然な形で看取るという事が経験できました。初めて人が亡くなる事で「お疲れ様でした。」という気持ちになり、自分の中で介護という仕事に遣り甲斐を持たないように思え、介護に対する意識が高まったと実感しました。

遣り甲斐がある分大変な仕事で、これからもっと私が経験した事のない事も経験すると思っています。それがどのような事か、経験の浅い私には想像できませんが、自分のすべき事を考え、嫌な事があってもそこから逃げ出さず頑張っていきたいです。



移植医療から終末期医療への転身（？）



西村医院 阿曾沼克弘

私はつい最近まで、熊本大学医学部附属病院の移植医療学寄附講座特任教授として生体肝移植という急性期医療の真ただ中に身を置いていました。故あって、今年 2 月に任期半ばで退職し、現在、せいりょう園の嘱託医、西村医院の一医師として、終末期医療、在宅医療、緩和医療に従事しています。西村医院での勤務はこの 4 月末までと短期間の予定ですが、私がなぜここ加古川に来たのか、そしてまだ短い間ではありますが、ここに来てこれまでに何を学び、今どう考えているのかということについて少し書かせていただきたいと思います。

私は、大学卒業後 33 年間の医師人生において、臨床の場ではずっと外科医として勤務しており、その半分以上は肝移植医療に携わってきました。ちょうど 1 年位前に、以前から悩んでいたある事情から、もう移植医療の領域からは身を引こうと決意しました。じゃあ、その後どうしようかと考えていた時、現在の終末期医療についてずっと抱いていた疑問が頭をよぎりました。

それは 3 年ほど前、救急外来の当直のアルバイトに行っている病院でのある体験によるものでした。その病院は救急患者を受け入れる急性期医療と慢性期の患者も扱う医療も両方行っていた病院だったのですが、ある時、慢性病棟のナースからひとりの患者さんが心肺停止になったので診てくれと呼ばれたことがありました。電話で伝えられた病棟に出かけ病室を覗くと、そこは 6 人部屋だったのですが、6 人の患者さんのいずれを見ても、どの人が心肺停止になったのかわからないくらい、微動だにしない人たちが、一様に胃瘻のチューブをつながれ、手足を折り曲げて、口を半開きにして横たわっていました。その光景を目の当たりにして、これは本当の医療なのだろうか、ちょっとおかしいんじゃないかと率直に感じました。そのことをある看護師さんに話して、「家族の人たちもあんな姿で長生きして欲しいと本当に思っているんだろうかね」と尋ねたことがありました。すると、その看護師さんは、「先生、あのね、一部の家族の方たちはあの人たちの年金をあてにしてるんですよ。だから 1 日でも長く生きてほしい、出来る限りのことをしてくださいって言うんです」とそっと教えてくれました。ああ、そうなのかと納得した反面、これはいかん、こんな医療はいかん、このままでは年金も無駄、医療費も無駄、マンパワーも無駄に使われている。医療従事者のモチベーションも失われているのではないかと感じました。今後、高齢者がどんどん増えていく世の中で、これは喫緊の課題であり、何とかしなくてはいけないと頭の片隅ですっと考えていました。

そんな思いを抱えながら、今後の進路を考えているときに出会ったのが、石飛幸三先生の『「平穏死」という選択』という本でした。終末期になって胃瘻をつけない選択もあるというのは既に医療界でも言われており、世の中は少しずつ変わって来ているとは感じていましたが、どういう風に死ぬことが自然なのかということとうまく理解させてくれたのが、石飛先生の本でした。人間は、最後は食べられなくなって死ぬ、「餓死」だと。しかしそれは自然なこと、そこには苦しみはないと述べられていました。その本に出会って間もなく、偶然にも石飛先生が熊本に講演に来られるという情報が入りました。その情報を聞いたのも全く偶

然で、看護師さんたちを中心とした会での講演でしたが、参加の許可をいただき、聞きにきました。そして、講演のあと、石飛先生と少しお話しをさせていただきました。このあたりから、私の中で、今後の進路についておぼろげながらロードマップが出来てきました。退職後もしばらくは細々と外科医を続けるけれども、熊大病院を辞めたら、少しの間終末期医療の勉強をし、出来るだけ以前から抱いていた疑問を医師の立場から解決していきたいと思うようになりました。そして、しばらくして、石飛先生に、先生がおられる世田谷区立特別養護老人ホーム、芦花ホームに1ヶ月位置いてもらえないかと相談しました。すると、芦花ホームは区立ということもあり、見学ならいつでもできるが、勤務は難しい。そういうことなら、加古川に自分が尊敬する渋谷さんという施設長さんがおられるので、その方に相談してみたらどうかという助言をいただきました。早速、せいりょう園の渋谷施設長にメールをしたところ、園の嘱託医の西村先生という方を紹介しましょうと言われ、その後は西村先生と直接お話しをして、一度加古川に見学に行くという話が決まりました。

昨年の11月17日、加古川を訪れ、渋谷施設長、西村先生とお会いして、せいりょう園やグループホームにしむらなどを案内していただきました。西村先生が石飛先生と同じような考えを持って、終末期医療、在宅医療、さらには緩和医療をされていることもわかりました。西村先生は、私が2~3ヶ月西村医院に籍を置いて勤務できないかとお願いしたところ、快諾され、給料もいただけることになりました。さらに、住まいはせいりょう園の自愛の家さくらの一室を無償で提供していただけるということで、私としては願ったり叶ったりの環境で「研修」ができることとなりました。

今年の1月末で熊大病院の業務を終え、2週間の有給休暇を取ることにしたので、その間に上京し、芦花ホームの見学にうかがいました。芦花ホームは20年前、バブル景気の真最中に、総額130億円をかけてつくられた、デザインもモダンで非常に豪華な施設です。現在特養に103人、ショートステイに20人の方が入っておられるとのことでした。一通りホーム内を見学させていただいたあと、石飛先生が、職員の方々に声をかけ、看護師さん、理学療法士さん、介護士さん、相談員さん、事務の方などと、ディスカッションをする場を設けていただきました。皆さん良い方で献身的に働いておられることはわかったのですが、見学を終え、芦花ホームを後にしたところで、私の中で何かもやもやしたものが残りました。石飛先生のお話しは総論賛成なのですが、各論ということになると少々疑問が残りました。つまり、石飛先生のおひざ元の芦花ホームでその理念が充分に実現されているのだろうかという素朴な疑問でした。例えば、芦花ホームには胃瘻を造設された患者さんが15名もおられ（そのうち芦花ホームでつけられた方は2名だけとのことでしたが）、私から職員さんたちへの「胃瘻からの注入を止めるという選択は検討されないのですか？」という問いに対して、「それは考えられない。反応がないように見えても、個々人でそれぞれ違って、反応らしいものが見られることもあるし、家族の思いも大切にしたい。」というお返事でした。そのような重度の方を介護している立場からすると、そのモチベーションを維持する上でもそういう考え方は仕方ないことなのかと思いましたが、700人もの待機者がおり、年間20~25人の死亡という事であればとても入所希望に追いつかないのではないかと感じました。また、最近の出来事として、ある入所者の方を職員が訪室したら心肺停止状態だった。呼ばれた看護師が、遠方に出張中の石飛先生の携帯をならしたが留守電になっていたので、慌てて救急車を呼んでしまった。携帯に留守電が入っていた事に気がついた石飛先生は、ホームと連絡を取って、ホームに居た係長と話し合い、家族とも話し合い、到着した救急隊の責任者とも話し合っ、石飛先生が帰ってから死亡診断書を書くということで、救急隊には帰ってもらったというこ

とがあったそうです。

もう一つのもやもやは、ホーム内を案内してもらった時に、どこのホールでも、車いすにうずくまってじっと押し黙っている多くの老人を目にしたときに感じたものです。「この人たちは、ほとんどしゃべれず、会話もできないのだろうか。何のために生きてるんだろう」と思いました。それはその前の加古川の見学に行った時にも感じたことです。ただこれは私の大きな誤解、誤った認識であることが、後に加古川で実際に老人と接してみてわかりました。

そんなどこかすっきりしない思いを持ちながら、2月15日加古川にやってきました。2~3ヶ月暮らせる、最低限の身の回りのものを持ってきたのですが、提供されたサ高住「さくら」の一室はとても快適でした。西村先生からは先に読んでおくようにと大井玄先生の『「痴呆老人」は何を見ているのか』という本を渡されました。この本は難しい記述もありますが、初めて認知症の方々と接する上では非常に大きな示唆を与えてくれました。前もって読んでおいて本当によかったと思っています。なかでも感銘を受けたのは、認知症には中心症状（単純痴呆）と周辺症状（奇声、徘徊、暴力、不潔行為など）とがあり、認知症の方にストレスがかからないように優しく接すれば周辺症状は抑えられるという記述でした。この本を読んだことで、同じ高さの目線、笑顔、敬語、軽いスキンシップ、そういった行為の大切さをまず認識して、高齢者と接することができたのは非常に大きいことでした。せいりょう園の中で、またグループホームで、そうした気持ちを持って一人一人に話しかけると、それまで、「呆けて何にもわかんないんだろうな」とタカをくくっていた老人たちと、実は普通の会話ができることがわかりました。もちろん個人差はありますし、話のつじつまが合わないことも多いのですが、逆にそんな会話が楽しいと感じました。私は、大きな誤解をしていたことに気付いたのです。ホールで黙ってじっとしているのは、ゆるやかな時間の流れに身を任せ、過去を振り返ったり、自分の世界にひたったり、瞑想しているのだと想像されました。

もう一つの発見は、ここは民間の「渋谷施設長のせいりょう園コミュニティ」だということでした。渋谷施設長の看取りの理念が、長い時間をかけてしっかりと職員全体に浸透していることが伝わりました。胃瘻を付けた人はたった一人です。しかも目をパチパチされてしっかりと反応される方でした。栄養の維持はなんと1日500kcal/500mlで既に2年間経過しており、そのことも大きな驚きでした。そして、ここせいりょう園コミュニティでは、特養、グループホーム、ケアハウス、サ高住といったいくつかの種類施設をそれぞれの個人や家族のニーズに応じて使い分けておられます。とりわけ、吉田相談員の「申し込みがあった時から看取りのはじまり」という言葉は大変象徴的でした。

終末期医療に携わろうかと考えた時に私がまず不安に思ったことは、果たして自分は高齢者と付き合っていけるのだろうか、特に認知症の人たちと関わっていけるのだろうか（最初の誤解があったように）ということでした。今回の経験を通じて、もちろん、毎日食事や排泄など身の回りの世話をされている職員さんたちにはまだ遠く及びませんが、自分でも大丈夫なんじゃないかなという感触はつかむことが出来ました。確かに、医療が高齢者にどこまで介入していくべきなのか、いつまでどのように長寿を目指していくのかといった点については、自分の中でもまだ不透明な部分もありますが、とりあえず終末期医療という領域の入口には立てたのではないかと考えています。

芦花ホームの見学に行った際に医学部を目指して東京で6浪中の次男と食事をしました。その時のことを次男がフェイスブックに記事として載せているよと長男が教えてくれました。私は全く知らなかったのですが、私に対しての暖かいエールと受け止めています。最後にそれを紹介したいと思います。

40

18

()

“ ”

...

“ ”

40

“ ”

58

20



()

58



平成26年3月10日（月）

加古川茶道協会「裏千家ときわ会」の皆さんにお茶をたてて貰いました。

和服姿でお茶をたてている姿を見て、過去にお茶を習われた入居者の方も居て懐かしそうな表情で愛でていました。





テーマ「認知症の周辺症状と自己肯定感について」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

認知症の中核症状の中に記憶障害があります。新しいことを覚えられない、ということや覚えていたことが思い出せないなどの物忘れの症状です。これは、認知症の診断を受けたほとんどの方に生じる症状になります。しかし、物盗られ妄想や徘徊などの周辺症状には個人差があり症状の出る人出ない人がいます。もともとのその方の持っている気質や性格、育ってきた環境などが大きく影響していると言われており、私たちの接し方や環境を整えることで症状を和らげることが出来ると言われてしています。

今回の語ろう会では、認知症の方に対する接し方が何故重要なのか、皆さんとお話ししました。

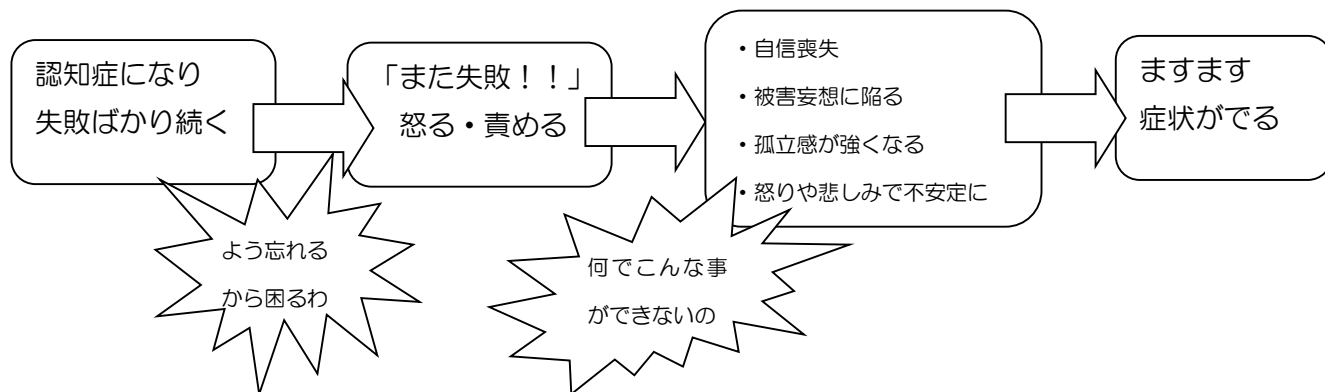
○認知症の方の気持ち

よく「ボケたもの勝ち」という表現を聞くことがあります。これは、自分自身は認知症になり何も分からなくなってしまうが、困っているのは周りの人間だけである、という表現の際に使われます。

認知症になれば何も分からなくなってしまう、と思われがちですが、そうではありません。とくに、認知症の症状が出始めた頃は、混乱や不安で一杯です。今まで出来ていたことが出来なくなる、覚えていたことが思い出せない、など自分自身でも何かがおかしいということを感じています。若年性アルツハイマーのクリスティーン・ブライデンさんは著書の「私は私になっていく」の中で自分が自分でないような感覚に葛藤していたことを綴っています。何で上手くいかないのだろうか、また失敗するのではないか、これから自分はどうなってしまうのだろうか、そういった不安や混乱、怒りや悲しみなどの感情を持ちながら過ごされています。

○周辺症状のメカニズム

私たちは、どんな時に不安になったり、落ち込んだりするのでしょうか。自分を否定された時、もしくは受け入れてもらえなかった時、馬鹿にされ自分のプライドを傷つけられた時。そういった場面で私たちは落ち込み、自信を失い、意欲がなくなり、孤立感が強くなり、誰かのせいにしたり、他者と比較することでしか自分自身に自信を持てなくなってしまう。これと同じ現象が認知症の人の心の中でも起こっています。



認知症の方の場合、そういった心の動きが、周辺症状として表に出てしまう場合があります。たとえば、物盗られ妄想などの症状は、財布や印鑑、通帳などのしまった場所を忘れてしましますが、これは、認知症の中核症状である物忘れによるものです。自分自身が仕舞った場所を忘れ、「他人に盗られた」と誰かのせいにしてしまうこととは別の症状です。この「他人に盗られた」と思うまでに至った心の動きこそが、周辺症状を引き起こす要因であると考えます。財布や通帳を失くした場面で、ご本人を咎めたり、失敗に対して怒ってしまった場合は、図のフローチャートのように自信を喪失し被害妄想に陥り、自分はこんなはずではない・・・きっと誰かが盗ったのだ・・・と責任転嫁してしまうことに繋がるのではないかと考えます。例え、ご本人に対して咎めるようなことをしなかったとしても、その人個人の気質や性格や育ってきた環境により、自分自身を肯定的に受け止めることの出来ない心境になるのではないかと、思うのです。

○感想

皆さんは自分のことが好きですか。自分のことが好きか？という問いかけに素直に「はい」と答える人は少ないのではないのでしょうか。今回の語ろう会では、15人の方が参加していましたが、「はい」と答えた方は、たったお一人でした。残りの14人のうち、「いいえ」と答えた方はお一人で、それ以外の方は「好きでも嫌いでもない」という答えでした。結果としては「自分のことが好きではない」という方がほとんどだったのです。日本中の方にアンケートをとった訳ではありませんが、私は密かに大多数の方は自分のことが、「好きでも嫌いでもない」、と答える方が多いのではないかと、思っているのです。何故そのような結果になるか、本当は自分のことが好きでも「好きだ」と言ってしまうことが、他者からみて自意識過剰、もしくは自己中心的な考えだ、と捉えられてしまうのではないかと、考えてしまい控えめに答えているのではないかと、考えられます。実際に答えた理由をお聞きすると、他人の目が気になる、好きだと答えることが恥ずかしい、などの意見が多いのです。しかしながら、自分のことを自分が好きだと思えることは、本来は他人の目を気にすることではなく、誰の影響も価値観も受ける必要のない自分自身だけに許された権利です。何故、「はい」と言ってしまうことが悪いかのように思ってしまうのでしょうか。

ある方から、「分からない事を分からない」と素直に言えない、と相談を受けました。分からない、と言ってしまうことで、自分がダメな人間だと思われてしまうのではないかと、思ってしまうのだそうです。何故、そのように思うのか詳しく尋ねると、その方は、小さい頃から、分からないことがあれば、「こんな事も分からないのか」と言われ、何かにチャレンジしようとしても「上手くいかないから止めたほうが良い」と止められ、失敗をしてしまうと、「だから止めとけと言ったのに」と親からしつけられてきたといいます。そういった環境で

育つことで、異常に自己評価が低く、何事にも肯定的に捉えることが出来なくなってしまうのではないかと、思いました。自己肯定感が低いと自信が持てません。自信を持って自分の本当の考えで行動することができず、他人の考えや価値観で行動するようになっていきます。本当の自分を抑圧し他人に従っているかのように生きることで、非常に苦しくなり本当の自分を見失ってしまいます。また、他者の意見を素直に受け止めることが出来ないため、自分のことを思って助言していることが、責められている、否定されていると捉えてしまい、人間関係が上手く築けず、せつかくの成長のチャンスを逃してしまう場合が多いようです。

親子関係のみならず、学校でも同じく抑圧された環境であると考えます。個性よりも協調性を重んじ、平均的ではない子供はいじめの対象になります。一方で学力により優劣をつけられ、競争させられます。社会で生きていく為、評価や競争が悪いことだとは思いますが、自己肯定感が低い場合は、他者との比較でしか自分の存在価値を見出せないような考え方になりかねません。こういった背景のもと、私たちは、自分のことが素直に「好きだ」と肯定的に答えることが出来ないのは当然で、自己肯定感の低い人間の集まりが我々の社会を構築しているのではないかと、思うのです。

認知症の方の周辺症状を引き起こす心の動きは、この窮屈な社会を現しているようにも思います。私たちは、失敗を咎め、排除するのではなく、不安な気持ちになっている方に「大丈夫ですよ」と声をかけチャレンジを応援することが、大切なのだと考えます。

【せいりょう園空き情報 平成26年3月14日現在】

- ①ケアハウス：1室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ②グループホーム：空きなし
- ③グループホームまどか：1室
- ④サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：2室
- ⑤サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【他ケアハウス空き情報】

- | | | | |
|------------|---------|------------|---------|
| ○恵泉 | ：1人部屋若干 | ○第二ケアハウス恵泉 | ：1人部屋若干 |
| | ：2人部屋若干 | ○青山苑 | ：1人部屋3室 |
| ○清華苑湘がら伊 | ：1人部屋3室 | | ：2人部屋2室 |
| ○ネバーランド | ：2人部屋2室 | ○あさなぎ | ：1人部屋2室 |
| | | ○キャッシル真和 | ：空室有 |
| ○サリットひまわり園 | ：1人部屋1室 | ○香楽園 | ：1人部屋1室 |

[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

せいりょう園待機者状況

＜平成26年3月12日現在＞

○入所判定済み者 392人（グループの内）

Ⅰグループ…140名 Ⅱグループ…149名 Ⅲグループ…103名

入所判定済み者の現在状況

在宅154名／特別養護老人ホーム入所中13名／ケアハウス入居中3名

老人保健施設入所中94名／障害者施設2名／医療機関入院中109名

グループホーム入居中12名／所在不明5名

○辞退その他 せいりょう園入所3名 他施設入所3名／辞退1名／死去4名



真宗大谷派 光念寺
本多 正尚 住職

デイサービス 谷澤 高明

私は前の職場を定年退職後、毎週1回「パソコン倶楽部」に参加している。30人ほどのシニアメンバーで構成され、ほとんどの会員は各地の公民館で「パソコン教室」の講師をしている。私には経常的な仕事があるので、そちらの方は勘弁させてもらっている。その倶楽部のメンバーから趣味は何かと聞かれることがある。かれらの多くはサンデー毎日(毎日が日曜)を大いに活用している。写真、絵、彫刻、陶器、流木細工、カラオケ、ゴルフ、スキー、釣り……。私はゴルフもクラブを置いて久しいし、絵の具も何本かは固まってしまっている。「仕事のほかにやることはないのか」と批判されるかもしれないが、自分自身は気にしない。そんなことより世間には、我々シニア世代ができる、しなければならない仕事はまだまだたくさんあるように思う。加古川の土手を車で走っていて河川敷の汚れ、ゴミの堆積には目を覆うばかりだ。公園のゴミもまた然り。気がついたらボランティアでやればいいじゃないかと言われるかもしれないが、私はボランティアに期待する姿勢は好ましく思わない。年金受給年齢の引き上げで、高齢者が何らかの形で働く世の中になりつつあるが、まだまだ採用する側には不安があるようだ。しかし能力には個人差もあり、やる気がある人には働く場所が提供されるような環境になってほしいものだ。自分たちの住む地域の清掃や安全確保のための作業などはいい対象ではないだろうか。高齢者にとって『その日やること』か『その日行くところ』があることはとても有意義なことであると思う。心のなかでは自分も「サンデー毎日」になったらやりたいと思っている候補はいくつかある。そうなった時、果たしてやれる能力、気力があるか分からないが……。

今月の仏教講話は先月に続いて、真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。ひな祭りのお話から、今日の本題の『躰：しつけ』についてのお話に入っていた。最初に元巨人軍の大選手で監督も経験した「王貞治」氏とその奥さん「恭子さん」の話から始められた。恭子さんは病魔のため57歳の若さで他界している。王氏は監督時代も含め何度も優勝を経験したが、涙したことはなかったらしい。その王氏が恭子さんが亡くなった時号泣したという。二人は巨人の練習場がある東京多摩川周辺で偶然出会ったらしいが、彼女の家は静岡県にある旧家で、厳格な家庭であつたらしくデートもなかなかままならず、6年かかってやっと結婚を許されたとか。夫人となった恭子さん、毎日、試合に出かける王氏を自宅の前に出て「いってらっしゃい」と一礼して送り出した。一度身についてたものとして普通にやっていた。また、家のことから子供のことまで心配の種になることは王氏には一切話さなかったという。自然と身についたそのような所作は実に美しいものであろう。身についたその美しい姿(モノ)が『躰』にほかならないと話される。

我を振り返り、はたして両親や先人から古き良きものをしっかり受けついでいるだろうか。新しいものばかりに目を奪われてしまっていないだろうか。また、そういうものを正しく次の世代に引き継いでいくことが出来ているだろうか。何年間も同じことを繰り返して聞かされているのに、いっこうに聞く耳を持たずであったり、また耳の痛いことを言ってる、で終わらせてはいないか。

「何歳になっても『いいことだなー』『なるほどなー』と感ずることは必ずあるはずでず。人間でずから、生きていく間には世話になること、迷惑をかけること、当然あります。そんな時、素直な気持ちで『私が悪うございました』とひとこと言えたらいいのに、と思ひます。最後に、皆さんが持っておられる『いいモノ』をお子さん、お孫さんには是非届けてあげて下さい」。で講話を終わられた。

『親をみて子は育つ』『育てたように子は育つ』二つの言葉が頭の中で踊る。
ありがとうございました。



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

厳しい冬が明け、春の気配が感じられるようになってきました。せいりょう園のお食事にも季節の旬もの「いかなごのくぎ煮」が登場しています。

この時期になると提供していますが、喜んでくださる方はもちろん、中には調理員へありがたいご指導をしてくださる方もいます。その指導内容は「いかなごのおいしい煮方について」です。女性利用者の多くは人生の大半、家の食事を一手に引き受けてきた大ベテランの奥様方です。当然、昔はくぎ煮の時期には何十キロにもなる量を煮て、家族や親戚などに配られていたそうです。その経験を活かし、まだまだ調理経験の未熟な私にもわかりやすくポイントを教えてくださいます。

毎年このご指導がとてもありがたく、また楽しみにさせていただいています。人生の大先輩方の知識の深さ、幅広さにはいつも尊敬の念を感じながら、今年も様々な料理を提供させていただきたいと思ひます。

材料

・いかなご	1kg	・濃口醤油	200cc
・酒	50cc	・砂糖(きざら)	230g
・みりん	150cc	・土しょうが	50g

上手に仕上げるポイント

- 鮮度の良い、いかなごを選ぶこと。
- 煮汁を手早く捨てること。
- 手早くさますこと。
- 大きく厚手の鍋を使用すること。
(1回に1kgが限度)

